

博士論文要約

島 克也

2016年8月

アイザック・アシモフ(Isaac Asimov)、アーサー・C・クラーク(Arthur C. Clarke)と並んで20世紀を代表するSF作家であるロバート・A・ハインライン(Robert A. Heinlein, 1907-88)は、これまでの批評において右翼的、左翼的、軍国主義的、反戦主義的、国家主義的、個人主義的など、相反するさまざまな呼称を与えられてきた。たとえば、ハインラインの著作のうち、SF作品に贈られる最高の賞の一つであるヒューゴー賞(Hugo Award)を受賞し、彼の代表作とみなされている長編小説『宇宙の戦士』(*Starship Troopers*, 1959)は、そこで展開される政治的言説がファシズムを称揚しているとして物議を醸し出したが、その1年後に出版され、同じくヒューゴー賞を受賞した『異星の客』(*Stranger in a Strange Land*, 1961)は、ヒッピー達の神秘主義的趣向に多大な影響を与えた聖典とみなされ、ハインラインはカウンターカルチャーのアイドルとして祭り上げられたのである。それゆえ従来のハインライン研究は、作品毎に異なる政治的言論を生み出すハインラインの思想基盤を見出すことができず、個別の作品分析を時系列順に列挙するものか、テーマを共有する小説群だけを抽出して部分的に作家像を論じるものにとどまっていた。

それに対して本論は、『宇宙の戦士』や『異星の客』などの、相反する政治的言論が展開されているハインラインの代表作のみを分析するのではなく、それらの代表作を世に送り出す直前の12年間、年1冊のペースで出版していた青少年向け小説群を詳細に分析することによって、ハインラインの思想的基盤を見出し、その包括的な作家像を構築することを目的とする。ハインラインが1947年から1958年の間に執筆した青少年向け小説群は、大手出版社から単行本の小説を出版することによって生活レベルを向上させたいという経済的な動機によって生み出されたものであった。それゆえ多くの批評家から、これらの小説群は商業主義的であり、彼の代表作と比較するとその文学的価値は低いと評価され、ほとんど批評の対象になることはなかった。しかし、彼にとって初めてとなる大手出版社との協業において、ハインラインは、青少年向け小説の出版に携わる人々からの絶え間ない干渉に苛立ちを感じ続けており、この時の苦痛に満ちた経験が、その後の代表作のテーマ選択や、作品内で展開される政治的言説に決定的な影響を与えている。それゆえ、青少年向け小説群を執筆した12年間に、彼の文学エージェントを介して伝えられた大手出版社からの修正要求や、それらの要求に対するハインラインの反応を参照しつつ個々の作品を分析すると、後の代表作において表明される政治的言説の多様性の根底にある思想を見出すことができるのである。

青少年向け小説を執筆するハインラインに幾度も修正を要求したのは、スクリブナーズ(Scribner's)社に所属するアリス・ダルグリーシュ(Alice Dalgliesh)という名の編集者であるが、彼女が要求する修正は、スクリブナーズ社内で設けられて明文化された基準にもとづくものではない。その一方で、彼女が独自に設けた特異な基準によるものとも言いがたい。それは「青少年読者が読むにふさわしい教養的なもの」という曖昧なものでありながら、アメリカ社会全体において普遍性を持つ基準だったからである。その基準を構築するのは、アメリカ社会の伝統的な道德・倫理意識を維持する立場にあることを自認し、同時に他者からもその資格保有者であることを暗黙のうちに認められている人々であった。彼らが共有しているこの曖昧な基準と、その基準を生み出す価値観は、昨今のホワイトネス・スタディーズにおいて「白人性」と呼ばれている、新たな人種区分で規定される白人の資質と深い関係がある。

植民地時代から第二次世界大戦前までのアメリカでは、肉体的な差異を根拠とする可視的な人種区分が社会システムに組み込まれていたが、多文化社会を標榜する戦後のアメリカでは、白人が本来保持すべき教養・社会的地位・愛国心・キリスト教に基づく伝統的社会慣習を肯定する態度などの、後天的に獲得可能な資質を根拠とする不可視の人種区分が、政治・経済・文化に大きな影響を与えるようになった。そのようなアメリカ社会において、青少年向け小説は、後天的に獲得可能な白人性を保持する人々が運営する国家の維持・発展に貢献する、健全な人材に与えられる教材、という側面を持っているのである。ハインラインがダルグリーシュによる修正要求に苛立ちを感じ続けたのは、ドイツ系移民とアイルランド系移民の子孫であり、従来の人種区分では白人に区分される外見の持ち主であるにもかかわらず、戦後のアメリカ社会を統制する原理である白人性に欺瞞を感じており、既得権益の保護に貢献する一員となることに喜びを見いだせなかったからと解釈することが可能である。

ハインラインによる12作の青少年向け小説は、「帝国からの植民地の独立」をテーマとするもの、「新たなヒーロー像の模索」をテーマとするもの、「出版当時のアメリカを取り巻く国際社会情勢」をテーマとするものに分類することができるが、これらの小説を白人性の観点から俯瞰すると、白人性に対するハインラインの姿勢が明確になる。「帝国からの植民地の独立」をテーマとする小説は、自由と独立を描く物語であると同時に、従来の可視的な人種区分が終焉を迎え、多文化社会における特権を意味する白人性によって構築される不可視の人種区分が発展してゆく様子を描いている。また、「新たなヒーロー像の模索」をテーマとする小説では、19世紀末におけるフロンティア消滅によって、従来の開拓者型のアメリカン・ヒーローが存続不可能となった後に、新たなヒーロー像を模索する必要性が語られる一方で、白人性を保持する人々によって運営される社会は、社会の運営に携

わるヒーローを必要とせず、従順で健康な国民のみを必要としていることが描かれている。そして「出版当時のアメリカを取り巻く国際社会情勢」をテーマとする小説では、第二次世界大戦後に西側諸国を率いる盟主としてのアメリカの国家的責任が語られる一方で、アメリカが理想とする多文化主義型の社会は、民族・宗教・文化の併存を原則としつつも、実際には特定の民族・宗教・文化を中心に据えたランキング社会であり、後天的資質であるはずの白人性を獲得する機会が「新参者」にはほとんど与えられず、既得権益を保護する傾向にあることが訴えられている。このように、ハインラインの青少年向け小説群では、多文化の共存を標榜しつつも、白人性を保持する人々によって権益が独占される社会の不健全性が描かれ、ハインラインの作品にさまざまな修正を要求する白人性そのものが、アメリカ社会の内部に拡がる「病」であることが示されているのである。

そして、青少年向け小説の執筆を終えた後に出版された『宇宙の戦士』と『異星の客』では、先に述べたように相反する政治的言説が展開されているが、白人性という観点からこれらの小説を俯瞰すると、これら二つの小説では、白人性を保持する人々によって管理運営される社会が限界を迎えて崩壊する過程と、新たな社会秩序の到来が描かれていることがわかる。すなわち、前者で描かれる社会では、軍属経験の有無によってのみ社会的地位が決定されるため、既存の白人性が支配力を喪失している。一方後者では、異星人がもたらそうとする新たな社会秩序の到来を阻止するために、従来 of 白人性を保持する人々が暗躍する姿が描かれることによって、白人性に基づくアメリカの社会制度や慣習が欺瞞に満ちたものであり、そこには崩壊の予兆が窺えることが語られるのである。

白人性によって支えられる社会の維持・発展に貢献する人材を育成する教材となる青少年向け小説を執筆し、白人性を保持する人々を主体とするアメリカの歴史・社会システム・道徳観・宗教観を肯定的に描くことを求められたハインラインには、青少年向け小説の出版業界からもう一つの使命が与えられていた。それは、当時のアメリカの青少年達の間で大きな流行となっていたコミックブック業界を「健全」な小説によって打倒し、コミックブックが青少年達に与えた「悪影響」を浄化することだった。コミックブックの多くは、マイノリティをはじめとする白人性を保持しない人々によって、従来 of 出版物とは異なる経路で流通して人気を博し、青少年に多大な影響を与えていたため、白人性を保持する人々によって形成される従来 of 出版業界は、コミックブックを敵視し、社会から排除しようとしたのである。従来 of 出版業界、図書館司書、PTA、宗教界、退役軍人協会、新聞業界などのさまざまな団体が、コミックブックに対する規制を求めてネガティブ・キャンペーンを始めると、コミックブックをアメリカ社会の諸悪の根源とする世論が支配的となり、その世論に連動してコミックブックに対する法的規制が短期間で強化され、コミックブックは表現の自由を奪われて換骨奪胎されてしまう。結果としてコミックブック

の売り上げは急激に落ち込み、1956年頃にはコミックブック業界は崩壊したため、従来の出版業界は、青少年の精神形成の主導権を巡る戦いにおいて勝利したと考えることができる。その一翼を担ったハインラインによる青少年向け小説群は、ダルグリーシュが体現する白人性に適合した修正が施されることによって表面的には「上品」かつ「健全」なものであったが、ハインライン自身は、幼少期の経験や自身の家系が影響して、マイノリティに対して同情的であったと同時に、白人性を保持する人々のみを厚遇するアメリカ社会に批判的だった。それゆえ、ハインラインは、彼の青少年向け小説において、人種やエスニシティに関して直接的に言及することは避けつつも、マイノリティを主要な登場人物として活躍させたり、ダルグリーシュが知り得ない性的な隠語を使用したりして、青少年向け小説というジャンル自体に挑発的な姿勢をとった。こうして、それらの「隠し要素」を小説内に挿入することによって、かつて親の目を盗んでコミックブックを愛読していた青少年達に、新たな「密かな楽しみ」を提供していたのである。

本論では、このようにハインラインが12年間にわたって執筆を続けた青少年向け小説を、彼の生い立ちや時代背景、担当編集者ダルグリーシュとの葛藤を参照しつつ、白人性の観点から分析することによって、ハインラインの作家としての姿勢がこの時期にはっきりと形成されていったことを論じる。さらに、この時期の執筆を通し、ハインラインは青少夫妻で世界旅行を楽しみ、一軒家を所有できるほどの富を得ただけではなく、大手出版社から青少年向け教養小説を出版する著名な作家という社会的地位も確立した。その結果、ハインラインはスクリブナーズ社以外の大手出版社からも単行本の出版が可能となり、編集者からの修正要求を受けることなく『宇宙の戦士』や『異星の客』などの代表作を自由に執筆することができるようになる。本論の最後では、青少年向け小説を執筆した後のハインラインが、スクリブナーズという白人性を体現する出版社から与えられた権威を利用して、白人性を保持する人々が、アメリカ社会を自らの利益追求のために改変してゆく「悪行」を批判し続けた点を分析する。